

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第38号

News Letter

2021年3月30日発行



写真:ラオス ゾウムシ養殖世帯をモニタリングのため訪問

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



動き出す ISAPH!

ISAPH事務局 佐藤 優

ISAPHの活動を応援してくださっている皆様、寄付や賛助会員としてご支援いただいている皆様、いつも本当にありがとうございます。昨年度より、事務局長として就任しております佐藤です。

2020年は、きっとたくさんの方が新型コロナウイルス感染症の影響を受け、辛抱の多い、忍耐を余儀なくされた一年になったことだと思います。私たちもその一人でした。現地で活動する邦人職員は突然帰国することとなり、インターネットを用いてなんとか遠隔でプロジェクトを進めることができましたが、再渡航の見通しは一向に立たず、多くの制限の下、一步ずつ前進するのが精一杯の一年でした。とはいえ、不意に得られたこの期間は、私たちの活動を見直すきっかけにもなりました。どうすればISAPHがより多くの人々に支援を届けることができるか、どうすればもっと効果的なプロジェクトを実施することができるか、ISAPHの未来に向けた課題をチームで考える時間を持つことができました。

ISAPHは、その母体である福岡県久留米市の聖マリア病院と連携することで、事業に携わる高度な専門家を確保し、質の高いプロジェクトを展開することができています。各国のプロジェクトに必要な資金は、会費や寄付金、助成金や事業収入によって賄われています。嬉しいことに、多くの人・団体からご協力をいただき、安定してプロジェクトを実施できたことで、現地政府からも厚い信頼を得ることができています。最近では、私たちへのニーズも高まり、「政府の保健予算にも限りがあるため、是非、活動する地域を広げてほしい」との声も強く聞かれるようになりました。ラオスやマラウイには、まだ支援の行き届かない遠隔

地が存在しており、アクセスの悪い地域は経済的発展の恩恵からも遠く離れています。ISAPHの職員が全員で意見を出し合い、そのような場所で暮らす住民にも支援を届けたい、どのような地域に生まれても健康になる権利を知ってほしいとの思いがあることを確認しました。しかし、事業拡大のためにはさらに人材を雇用しなくてはならず、資金が必要です。私たちは現地のニーズに応えるため、「健康がすべての人の権利である」という思いを形にするため、今よりも多くの支援者と繋がり、一緒に課題を解決するための体制を作る必要があると思いを新たにしました。

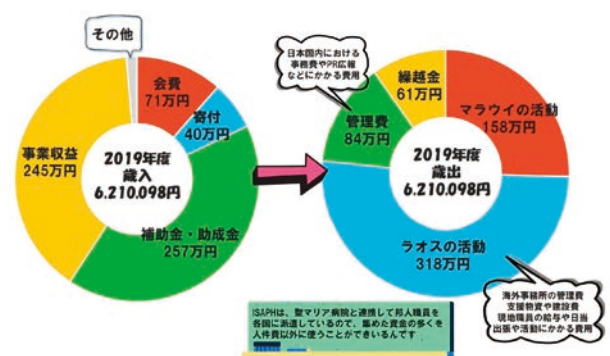
そして、その課題を克服するために、2020年度よりいくつかの新しい取り組みを始めました。

- 広報担当者の配置
- 収支報告における資金の透明性の強化
- 寄付・会費のクレジットカード決済の導入
- ホームページのリニューアル
- SNSメディア（Facebook/Twitter/Instagram）による情報発信
- ISAPHメンバー（賛助会員）を対象としたオンラインサロン（Slack）の開設
- ラオス・マラウイをテーマにしたオンラインイベントへの参加
- 小中高校/大学などでの講義・講演活動
- 小中高校/大学などを対象としたオンライン・スタディツアーの計画

これまでISAPHは、私たちに共感して支援してくださる方を探すための情報発信が十分でなかったと反省し、チームが一丸となって情報発信を行うことを確認しました。さらに、これまでの業務を見直し、広報担当者を配置しました。情報発信の方法としては、SNS（Facebook/Twitter/Instagram）の利用を開始し、より多くの人々が情報に触れる機会を得られるよう取り組みを始めました。SNSでは、ISAPHの日々の活動を紹介するだけでなく、職員からのメッセージ



広報担当の村上と事業PRのため元スポーツ庁長官鈴木大地さんを訪問



詳しい財務状況はこちらをご覧ください

ISAPHの寄付等の財務状況を分かりやすく表示（ホームページより抜粋）

や現地で撮影した動画なども発信し、私たちの活動とその想いを知ることができるように心がけています。寄付や賛助会員を募るにあたっては、財務状況の透明性を高める必要があると気づきました。リニューアルしたホームページには、収支状況を分かりやすく説明するページを設置し、いただいた寄付や会費が、職員の給与や管理費ではなく、現地活動のために利用されていることが分かるように図解されています。

そして、これまでに比べて、学校や大学での講義・講演の依頼を積極的に受けるようにしました。withコロナ時代を考えると、海外へ渡航することに対するリスクがこれまでより大きくなり、海外について知る機会が減ってしまうかもしれません。そんな時こそ、現地で活動する私たちが「現場の声」として、ラオスやマラウイにおける健康問題や草の根国際協力の魅力を伝えることができると考えました。日本で暮らしていてもラオスやマラウイの保健課題に触れることが出来るように、ISAPHで働く一人ひとりが地球市民として世界の現状について情報を発信していくことが新しい事務局の方針です。もちろん、学生インターンの受け入れ、iサイクルなどのボランティア活動との連携もこれまで以上に精力的に取り組んでいきたいと思っています。

これからのISAPHは、日本国内にも目を向けて私たちの想いや取り組みを自分たちだけのものとせず、ラオス・マラウイと日本を繋ぐ架け橋のようになることを目指して情報を発信していきます。私たちの活動を知ることを通して、支援・参画して下さる方を一人でも多く集め「ISAPHメンバー」として迎え入れたいと思っています。どうか、この記事を読まれている皆様も、私たちと一緒にラオスやマラウイの魅力、そして地域で暮らす人々の健康について考え、行動してみませんか？



マラウイ事務所職員浜中が参加した『アフリカ座談会(マラウイ編)』



大分県立看護科学大学(看護学部)のオンライン講義



山梨県立大学(看護学部)の講義



見やすく刷新したホームページ



日々の新鮮な情報をSNSで素早く発信



ISAPHインターンシップ ～キャリア構築の重要なマイルストーン～

長崎大学大学院 熱帯医学・グローバルヘルス研究科 国際健康開発コース
スクダヴォーン・スクサヴァット

NPO 法人 ISAPH での 2 カ月間のインターンシップは公衆衛生の専門性を高める大変貴重な機会でした。ISAPH ラオス事務所の事業はカムアン県サイブートン郡における母子保健サービスの利用率の向上と栄養改善を目指しています。現地のリアルな情報に基づいて、対象地域の課題を特定し、その原因を分析して解決策を探り、実行計画を立案するという問題解決型のアプローチを学びました。プロジェクトを指揮する立場として重要なことは、様々な専門家や現地のスタッフやカウンターパートと議論する中で、より良い解決策を見出すために批判的に考え続けることだと感じました。

現地の課題の一つは、お母さんたちは医療施設での分娩が無料かつ安全であることを知っているにもかかわらず、様々な理由でリスクを伴う自宅分娩を選んでいくことです。ISAPH の事業の特徴は、住民が自分たちの健康課題に気づき、健康でいるための手段として母子保健サービスを利用できるように住民の行動変容を促すことです。お母さんが施設分娩にニーズや価値を見出さない限り、いくら援助者が勧めても行動変容には至りません。ISAPH は現地の郡保健局・ヘルスセンターと協働して「自分たちの健康は自分で守る」というマインドセットへの切り替えを戦略とし、住民にアウトリーチ活動を展開していることを学びました。

二つ目の課題は、妊婦/母親と子どもの栄養状態の悪さです。慢性的な低栄養の改善には、ラオスの文化や所得レベルに合わせて、住民が実行可能な解決策を考えていく必要があります。現地で食べられている昆虫を養殖するという ISAPH の取り組みはとても興味深かったです。ゾウムシは普段の食生活で不足しがちな脂質や鉄・カルシウム・ビタミンを摂取する貴重な栄養源であることを知りました。昆虫を養殖することで必要な時に必要な栄養素を摂取でき、また、養殖した

昆虫を販売して現金収入を得ることで、別の栄養素に富んだ食料を購入できるという発想は、私たちラオス人の文化・価値観・自主性・持続性を大切にしたい事業だと感じました。

インターンを開始して 10 日ほどすると、ISAPH の事務所を離れ、名古屋公衆医学研究所を訪問する機会が得られました。ここでは日本のがん検診、特定健康診査・特定保健指導を学びました。保健指導に携わる日本の保健師から学んだことは、住民と一緒にその人の健康課題を見える化し、実行可能な計画を立て、成功したら褒めることの大切さです。私の所属先のマホソット病院を受診する患者が健康診断を受けたあと、保健指導する際の手がかりを得ることができました。

また、ISAPH マラウイ事務所の職員からマラウイにおける母子の健康課題と栄養改善プロジェクトを学ぶ機会もいただきました。現地の事務所とオンラインでつなぎ、レシピを紹介しながら料理教室を開催していました。伝統的な食習慣では不足がちな栄養素に配慮しつつ、現地の人に美味しいと思ってもらえるレシピ作りを心がけていました。いろいろな食材を料理に取り入れてもらうために家庭菜園を広めていることも学ぶことができました。

私が長崎大学大学院で学んできた公衆衛生とプロジェクトマネジメントに関する理論が、ISAPH でのインターンシップを通して、ラオスやマラウイの健康課題の解決のためにいかに実践・応用されているかを学ぶことができました。この機会は私の今後のキャリア構築の重要なマイルストーンになると感じています。ラオスの健康課題に取り組む保健医療従事者として、今後も ISAPH と良好な関係を続けていきたいと思えます。素敵な経験を積ませていただき、本当にありがとうございました。



名古屋公衆医学研究所を訪問



修了式の様子

ラオス人インターンシップの受け入れ ～ISAPHの新たなパートナーシップ～

ISAPHラオス 安東 久雄

2020年11月16日から2021年1月15日までの2カ月間、ISAPHラオス事務所として初めてのラオス人インターンとなる看護師のスクダヴォーンさんを受け入れました。指導担当者として、彼女の志望動機書に記載された学習目標が達成されるように、学習課題とスケジュールを設定しました。彼女がカムアン県保健学校の卒業生でもあり、カムアン県サイブートン郡における母子保健課題とその解決手法にとっても興味を示していたので、プロジェクト・サイクル・マネジメントのフレームワークを利用して、ISAPH事業地の母子保健課題の分析と目標設定、実行可能な活動とその評価方法について、現地職員とのディスカッションを交えながら実際のデータ・情報を通して学ぶように調整しました。ISAPHでのインターンシップを通して、彼女が大学院でこれまで学んできた公衆衛生の理論がISAPHの事業を通していかに実践されているかを学ぶ機会となったこと、キャリア構築の重要なマイルストーンになったという報告を受け、大変嬉しく思います。

ISAPHラオス事務所の学びとしては、彼女がマホソット病院婦人科病棟で長年勤務してきた経験、特に「Five goods One satisfaction」プロジェクトの教訓を知ることができました。それは、5つの良い行い（①温かい歓迎、②病院の清潔さ、③患者の快適さ、④正確な診断、⑤正しい治療）によって、保健医療サービス利用者の満足度を高めようとする試みです。ISAPHラオス事務所では、対象村の住民が必要な時に母子保健サービスを利用できるように、長年アウトリーチ活動と健康教育を実施してきました。住民に妊婦健診や施設分娩などの母子保健サービスを利用したいと思わせるには、医療機関のスタッフと住民との信頼関係の

醸成が必要不可欠であり、さらに提供される母子保健サービスが住民にとって本当に価値のあるもの・満足できるものである必要があることを再確認できました。現在は彼女とのディスカッションからの学びを発展させて、住民が母子保健サービスを利用したいというニーズをいかに生み出すか、住民に母子保健サービスを利用することの価値をどのように伝えていくかについて戦略を練っているところです。

ISAPHラオス事務所でインターンを受け入れるにあたり、日本人職員がラオスへ渡航できた際には、一緒に対象村を訪れる計画もありました。しかし、ラオス政府の新型コロナウイルス感染拡大防止策により、ラオスへの渡航が叶いませんでした。彼女は母国ラオスを良くしたいという強い志を持ち、大変勉強熱心でもあるため、将来ラオスを代表する保健医療従事者になると思います。ラオスの健康課題に取り組むISAPHラオス事務所として、今後も彼女と良好な関係を続けて、大学院修士課程が修了した後、ぜひISAPHの事業地を訪れてもらい、ISAPHのプロジェクトを体感してもらいたいと考えています。



ラオス政府とのオンライン会議に出席



インターン最終日にラオスのお土産をいただきました



昆虫養殖技術普及事業としてJICAプロジェクトを開始しました！

ISAPHラオス 石塚 貴章

ISAPHはNPO法人食用昆虫科学研究所とともに、独立行政法人国際協力機構（JICA）と草の根技術協力事業として「農村部住民の食糧事情向上を目指した昆虫養殖技術普及事業」の業務委託契約を締結しました。事業期間は2020年12月25日から2023年12月22日までの3年間です。

この事業は、サイブートン郡の3村（パークーン村、パークワイトン村、パークワイドン村）の5歳未満児とそのお母さんたち230世帯を対象に昆虫養殖に必要な技術の支援をしていきます。技術支援する昆虫養殖はヤシオオサゾウムシ、トノサマバッタ、エリサンの3種類です。

ゾウムシは3村の子どもたちの不足しがちな栄養素の一つである脂質を多分に含んでいる食品です。養殖世帯が自ら食すことで、栄養素のバランスが改善されることを期待しています。

昆虫を食べる？ と驚かれるかも知れません。しかし、昆虫食はラオスにおける食文化の一つです。市場に行くとお肉や野菜の横に食用昆虫も陳列されており、日常食材であることが体感できます。例えば、この3種類の昆虫の他にもアリやハチ、タガメなど様々あります。どれくらいの金額で取引されているかというと、1kgあたり鶏肉、牛肉、豚肉が350～580円の価格帯である一方で、ゾウムシは約900円と比較的高価な食材にあたります。そのため、現金収入のある人は市場で購入しますが、そうでない人は森や山で自ら自然採取して食しています。自然採取のため、入手できる時期が季節に依存し、年間を通してみると食べることができない時期があります。本プロジェクトの養殖技術の普及によって、住民が1年中安定して昆虫を食べることができる環境を目指します。

昆虫養殖技術の普及と併せて、村落栄養ボランティアや村落保健ボランティアたちと一緒に、正しい栄養に関する知識をお母さんたちに伝えます。今までは栄養教育により栄養バランスを考慮した食生活を意識するようになっていても、現金収入がないため、適切な食材にアクセスが出来なかったということがありました。しかし、養殖した昆虫を販売して得た現金で、それらにアクセスが可能になります。

このプロジェクトでは、3年間かけてメンター世帯から一般世帯へと段階的に普及拡大をしていきます。すでに本プロジェクトの前身となる味の素ファンデーションAINプログラムにおいて、16世帯にゾウムシの養殖技術の支援を開始しています。この16世帯の中には自ら試行錯誤し養殖を拡大しようと試みている人がいたり、サイブートン郡保健局のボラパー氏からは「早く一般住民に拡大して欲しい」という要望が来ていたり、本プロジェクトのニーズと期待の高さを私たちは感じています。3年後には、いつでも誰もがこれらの昆虫にアクセスでき、健康になる姿を目指して、これから邁進していきますので、ぜひ楽しみにしてください！



昆虫養殖世帯とISAPH現地職員



ISAPH現地職員による技術支援の様子



乳幼児健診会場での離乳食調理実習を開催しています

ISAPHマラウイ 浜中 咲子

現在ISAPHマラウイ事務所では、乳幼児健診会場で生後6～8カ月の子どもを持つ親に対して離乳食の調理実習を行っています。

マラウイは、生まれて9カ月頃から低身長・低体重になる子どもの割合が増加し、18カ月でその割合がピークを示し、その後横ばいで移行をしていきます。マラウイでは通常6カ月から離乳食を開始します。そのため、9カ月頃の栄養状態には、離乳食の影響が大きいのではないかと考えました。

ISAPHマラウイ事務所は現在のプロジェクト初期から、乳幼児健診会場で低体重児の情報を集め、その対象者に家庭訪問を実施しています。この訪問を通して、低体重に陥る家庭では離乳食として主にウファ(主食用とうもろこしの、粒の中心部のみを使用した白い粉)だけのお粥を食べさせている傾向が強いことがわかりました。

また、低体重児は1日の食事の回数が少ないこともわかりました。2017年のプロジェクト開始時の調査においても、低身長の子どもは朝食を欠食しているケースが多かったことから、食事の回数が低身長・低体重に関連すると考えました。そのため、食事回数を増やすことが低体重児を減らすために必要だと考えられます。これらの理由から、離乳食調理実習では2種類のお粥と間食の食べさせ方についての指導を実施しています。

一つ目がマラウイで一般的に離乳食として作られている、とうもろこしのお粥です。主な材料はガイワと呼ばれる主食用とうもろこしの粉です。ガイワはとうもろこしの粒の外側を一緒に粉状にしており、薄い黄



間食のバナナを食べる子ども

色をしています。同じとうもろこしの粉でも白いウファに比べてガイワの方が、タンパク質・脂質・ミネラルなど栄養素が多く含まれています。紹介しているお粥にはガイワの他に、炒った大豆粉・ピーナッツパウダー・牛乳・葉物野菜を加えています。

二つ目がフタリと呼ばれている、さつまいものお粥です。さつまいもを潰して、そこに炒ったピーナッツパウダーを混ぜています。フタリは村人の間でも知名度は高いのですが、ISAPH現地職員によると実際の調理方法を知らない母親もいるという意見があり、この調理実習で紹介するレシピに加えました。

最後に、手軽にとれるおやつの例としてバナナを紹介しています。バナナを選んだ理由は、1年を通して現地で手に入りやすいため、母親たちがすぐに導入しやすいと考えたからです。

低体重児の家庭訪問をすると、子どもがお粥を食べたがらないという意見が母親からあります。しかし、ISAPHが現在紹介をしている二つのお粥はどちらも炒った大豆やピーナッツパウダーを入れることによって、通常のお粥よりも風味が増すため、実習に参加した母親たちの子どももよく食べてくれます。実際に美味しそうにお粥を食べる姿を見て、母親たちが離乳食を作るモチベーションにも繋がっていかばと思っています。

この調理実習を始めた頃は直接ISAPH現地職員が母親たちに離乳食調理の指導を行っていましたが、今では参加経験のある母親が新たに参加した母親たちに向けて調理指導を実施しています。この調理実習を通じて、より良い成長を促すだけの食でなく、美味しさや楽しさも一緒に伝えていきたいと思っています。



調理実習で作ったお粥を試食

最近のできごと 2020年10月～2021年1月

- 10月2日 【マラウイ】
ムジンバ県南部保健局と共同で、活動地域ヤコブ・ピリ村のセント・アンズ・ヘルスポストに保健ワーカー用住居の建設を開始

- 10月13日 【ラオス】 MOU 2 調印式を実施

- 10月16日 ISAPH事務局の佐藤が山梨県立大学で講義

- 11月1日～3日 第35回日本国際保健医療学会（グローバルヘルス合同大会2020）に参加

- 11月3日～5日 【マラウイ】
プロジェクト活動地域3村を対象に5歳未満児の摂食調査を実施

- 11月16日～1月15日 長崎大学大学院のスクダヴォーン氏をインターンとして受け入れ

- 11月26日・27日 インターンのスクダヴォーン氏が名古屋公衆医学研究所を訪問

- 12月15日～18日 【マラウイ】
保健省栄養・HIV/AIDS部局の実施する訓練講師向け研修会にISAPH現地職員が参加

- 12月25日 【ラオス】
JICA草の根技術協力事業「農作物住民の食糧事情向上を目指した昆虫養殖技術普及事業」の業務委託契約を締結

- 1月26日 【ラオス】 MOU 2 3ヵ月定期活動会議を開催

- 1月21日 ISAPH事務局の佐藤が大分県立看護科学大学で講義



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

—— 特定非営利活動法人ISAPH ——

【福岡事務所】

〒813-0034
福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <https://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理事	渡部 和男	東京理科大学 特命教授
理事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPH ニュースレター 第38号 編集スタッフ】

佐藤 優 / 石原 潤子

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設
(一般病院2 〈3rdG: Ver. 1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病(後)児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。